ヨコハマに再生させよう

増やす意識が大切 中田 宮脇 防災拠点、鎮守の森

――横浜市の緑が少なくなってきている現状と課題について聞きます。

中田市長　市の面積に占める緑の割合「緑被率」は、2001年で31・2%。20年前から比べると9ポイント下がっていて、25年前と比べると15ポイント下がっています。緑が減る中で、「どうやって緑を守るか」という言葉は長らく使われてきていますが、私が市長になって、「守ろう」と思っても守るだけでは緑被率は下がっていく。緑を増やすんだ。緑を増やす努力をしてはじめて、どれだけ守られるかという結果になっていく」。そういう考え方で取り組んでいます。

――宮脇先生は、鎮守の森が少なくなってきた現状を見てこられました。

宮脇氏　1970年の終わりごろ、神奈川県教育委員会の依頼で全県下の調査をしたら、370の鎮守の森がありました。それが今は40カ所。鎮守の森はいざというときの防災拠点となるんです。セメント砂漠の中の美化運動としての緑化も大事だが、何でも木を植えればいいというものではない。大事なのはエコロジカルなふるさとの森づくりで、植える木が本物であれば生態系はついてきます。

ドリームランド跡地　横浜市は、02年に閉園した「横浜ドリームランド」跡地を買い取り、硬式野球場のある公園と市営墓地を一体化した緑地にする。計画では、約13ヘクタールの土地に、公園10ヘクタール、墓地6ヘクタールを造る。墓地部分に駐車場が併設され、3ヘクタールを公園と一体化させる。墓地は緑に囲まれた西洋式約7500区画などを設置。硬式野球場は、約3000人収容の観客席を兼ね備えた天然芝の球場となる。

ドリームランド跡地は中古車オークション会社「ユー・エス・エス（USS）」が購入しオークション会場の設置を計画。交通渋滞や大気汚染が発生すると周辺住民の反対運動もあり、横浜市がUSSと交渉を重ねた結果、97億円で買い取った。

ふるさとの木によるふるさとの森づくり　「その土地本来の木」を使い、日本古来の鎮守の森のノウハウと生態学のルールを組み合わせた方式。横浜国大の宮脇昭名誉教授が提唱。30年間で国内780、海外500カ所で市民の手による森づくりが繰り広げられてきた。

現地での植生調査を綿密に実施し、本命の木が判明したら種を拾い、まく。発芽した幼苗をポットに移した後、根を張らせ、高さ30～50センチになったら主木と共生する他の樹種群の幼苗と一緒に「密植・混植」する。植栽後は3年間だけ草取りをすれば、あとは自然淘汰（とうた）に任せる。

横浜市も「ふるさとの緑事業」として、市内60種類の在来樹木を選び、01～03年度に12カ所、2・54ヘクタールで植栽。市民160、20人が参加した。

赤レンガ、緑で囲む 中田 宮脇 市民主役の森づくり

――緑を増やすためにどのような取り組みをされていますか。

中田市長　例えば地下室マンションの建設では、横浜の最後の緑とも言える斜面地の緑が狙われ、切り崩される実態があります。住宅地の環境を守るために、条例で建設の規制をするだけでなく、緑を植樹することを条例の中に盛り込みました。

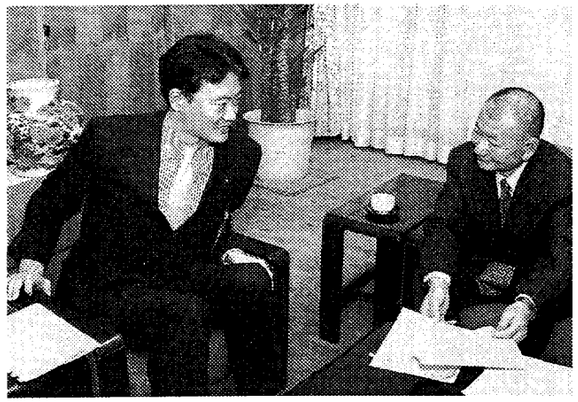
職員に良く言うんです。市役所の窓の外を見ると緑は確かに見えます。なんとなく緑があると思ってしまうけれども、でもこの程度では緑のうちに入らない。飛行機や高いビルの上から見ると、カウントできない緑なんですよ。

市には、「こどもの国周辺」、「三保・新治」といった緑の7大拠点と、都心部周辺に市街地を臨む「三ツ池・獅子ケ谷の丘」、「篠原・岸根の丘」といった七つの丘という、まとまった緑があります。就任以来「民の力を活かす」と言ってきましたが、緑を守ることは市民と一緒にできるが、まとまった緑の面積を確保し増やしていくことなると、行政が主体的に動かないといけないと思っています。

ドリームランド跡地を市が買い上げる決断をしたのも緑を増やすチャンスだと思ったからです。遊園地にはもともと緑があり、さらに遊具を取り払えば、緑をもっと増やせる。横浜市は財政上厳しいので、土地を新たに買い上げることはほとんどしていません。でも緑のことを考えた時厳しい財政状況の中でも土地取得を決めました。

宮脇氏　環境問題は命の問題です。残念ながら企業も行政も警察も人が死なないと動かない。それでは遅すぎます。中田市長が総監督で、行政の皆さんが舞台監督で、350万人市民が主役となる森づくりが必要です。

全部を森にするのは無理でも、せめて周りを森で囲む。いざというときには逃げ場所、逃げ道になる。それには、まず木を植える。森ができて人が通れば道になる。核となる木を決めて、それを中心に多くの種類の木を混ぜる。混ぜると植えた時から競争が生まれる。初めの3年間は草が生えたら抜いて、3年たったら管理はいりません。後は、木の横は切っても頭は切らない。横浜市を命の森と共生した21世紀のモデルにして頂きたい。みなとみらい（MM）地区も、幅10メートルでも3メートルでも水際を緑で囲んでほしい。



対談する中田宏横浜市長と宮脇昭横浜国大名誉教授（右）＝横浜市役所で、塩入正夫写す

都会の緑が減っている。30年前、横浜市の面積の半分が緑に覆われていた。市民の力でヨコハマに緑を森を再生し、世界に広がる運動とするにはどうすればいいのか。国内外で「ふるさとの森」の再生を手がける横浜国立大学の宮脇昭・名誉教授（植物生態学）と、「環境行動都市」を掲げる中田宏・横浜市長に語り合ってもらった。

【司会は小川一・横浜支局長】

森通し知る大自然 中田 宮脇 学校の周りに植樹

――市民を緑の運動に引き入れて行くにはどういうことが必要ですか。

宮脇氏　横浜市には18区ありますよね。各区で森づくりをやって頂くと同時に、横浜の中心の見せ場のところは、全区長、市民が集まって、市長と一緒に木を植えて頂きたい。

中田市長　景観や色彩という形式上の問題ではなしに、緑が教えてくれるものがあります。春に芽が吹き、青々と茂り、花をつける木もある。夏を過ぎ秋には紅葉し、落ち葉が落ちる。そこを意識するだけでも、私たちが大自然の中で生かされていると、木を通して知ることができるんですね。

松下政経塾の時、毎日掃き掃除をしていて、葉が落ちるのは秋だけじゃないということを知りました。100種類ぐらい木があると、木によっては夏や冬に葉が落ちるものもありませんか。

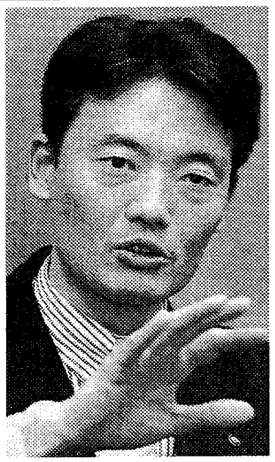
宮脇氏　常緑樹は一年中落ちます。落ち葉を拾いながら生きていけるのは命の証しです。今大事なのはあなたが生き延びるために、あなたの愛する人が家族が生き延びるには、落ち葉が落ちようとも日陰になろうとも、最低限、命の基盤として緑の表面積が芝生の30倍ある本物の立体的な緑を住宅の周りにつくるべきです。

中田市長　今、命を考えざるを得ないような悲しいニュースが毎日の新聞に出ていますよね。都会にある葉っぱが落ち、落ち葉がコンクリートの上で舞い上がるのを見ると、一面切なさを感じます。本来なら葉っぱが積み重なって、冬を越す虫がつき、やがてそれが虫たちの栄養になり、たい肥となって土となりそこに花が咲く。一連の循環が日常の中で失われてきた結果、命が粗末にされている社会と因果関係が明確にあると思う。

緑を見るだけでは駄目で、市民も一緒になって参加してもらうことが大事。森づくりボランティアとして市民の皆さんにお手伝いして頂くなど、行政と市民が一緒に緑を育てていく取り組みを進めています。そこに子供たちも一緒に入ることで、命の大切さを学ぶ機会にもなる。都会の人たちは緑の中に入っていくことを精神的に求めていて、実際、市民の参加意欲も高いんです。そこをマッチングしていくことが行政の役割です。

宮脇氏　学校の周りにも木を植えて頂きたい。幅1メートルでもいい、小学校1年生で植えると、6年で卒業する時は高さ4メートルになります。子供たちが自分で植えた木が大きくなる。卒業して母校を訪ねた時に、生きた命を見ることができる。自分たちで手入れすれば、生きた命の教育になります。今の子供は本物の命を知らない。テレビゲームのバーチャルな世界にいますから。

中田市長　MMは横浜を代表するスポットで、海側からとった夜景は観光パンフレットにも必ず出てきます。近未来的なコンセプトの中で、一つだけ残念なのは緑が少ないことです。例えば赤レンガ倉庫も、古いものをうまく生かしたという意味で横浜を象徴する建物ですが、緑が少ないんですね。環境行動都市を標ぼうする横浜にとっては重要なことですから、赤レンガ倉庫近辺に植樹するよう指示しました。緑に囲まれた赤レンガ倉庫にリニューアルできると思います。



なかだ・ひろし　横浜市長。青山学院大学経済学部卒業後、松下政経塾に入塾。ごみ問題に没頭し「ごみの中田」とも呼ばれた。日本新党の旗揚げに参画し、93年日本新党から衆院選に初当選。衆院議員3期の後、02年3月の横浜市長選で、4選を目指した現職を破って初当選を果たした。「民の力が存分に発揮される社会」を目指し、市政改革に取り組んでいる。著書に「なせば成る　偏差値38からの挑戦」など。64年生まれ。横浜市出身。